

聖書:ルカの福音書15章25～32節

説教:死んでいたのに生き返ったのだから

はじめに

イエスがあるとき、罪人と呼ばれている人たちと一緒に食事をしていると、パリサイ人、律法学者たちがそれを見て「罪人と食事をするとはどういうことか」と言って猛烈に抗議をします。それに対してイエスは、ご自分が罪人と食事をする理由についていくつかのたとえ話を始めます。前回は、ある父親から相続財産を分けてもらった家を出てしまった弟息子を取り上げました。この息子は結局、放蕩して財産を遣い果たしてしまうと、今度は父親をだまして家に入れてもらおうと企てるのですが、父親が遠くから弟息子を見つけると、かわいそうに思い、駆け寄ってきてこの息子の首を抱いて口づけをし、家に迎え入れる。そんな父親の愛に触れて、弟息子は罪の告白をしていった。そういう話でした。今日は、それに続いて兄息子の話に移ります。ここからイエスがどのようなことを教えるようにされているのか。ともに考えてまいります。

## 1 兄が怒る理由

### 1) 損害を受けたからか？

兄が畑から帰ってくると、家のほうが騒々しい。何事かと聞いてみるとこんな返事でした。27節。「あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事な姿でお迎えしたので、お父様が、肥えた子牛を屠られたのです。」

これを聞いて兄は怒り出し、宥めようとして外に出て来た父親にこう語ります。29, 30節「ご覧ください。長年の間、私はお父さんにお仕えし、あなたの戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しむようにと、子やぎ一匹下さったこともありません。それなのに、遊女と一緒に、お父さんの財産を食いつぶした息子が帰って来ると、そんな息子のために肥えた子牛を屠られるとは。」

兄が言っていることに共感する方もいると思います。また父親に対して文句を言いたくなるかもしれない。真面目に働こうともせず自堕落な生活してきた弟息子を、この父親はどうしてここまで喜んで歓迎するのか。これは父親の偏った愛情が問題だという話なのでしょう。もちろんそんなはずはない。

そこでまず兄が怒る理由ですが、すぐに二つのことが思い浮かびます。一つは、弟の放蕩のおかげ

で自分の財産も目減りして損害を被ってしまったのではないか。そう思って怒たのではないか。

実際にそんな話しは珍しくなくて、私の生まれ育った家でもありました。昭和の初め頃、親族の一人が東京で派手な生活をしていたらしく、しょっちゅうお金を送れという手紙が家に届くたびに、親が田畑を売って工面した。それで財産はすっかりなくなったのだと、家を継いだ私の父は嘆いておりました。

この兄の場合はどうか。父が言っています。31節後半。「私のものは全部おまえのものだ。」12節を見てわかるとおり、兄も父親から財産を相続していて、兄の分は手つかずでちゃんとある。ですから、弟が自分がもらった分をどう使おうが文句を言う筋合いがない。ところが兄は、まるで自分の財産が目減りしてしまったかのような被害者意識をもってしまった。父親はそれが間違いであることを指摘しました。

### 2) 父親のことを心配したからか？

兄が怒った理由の二つ目。弟は、まだ父親が元気なのに、「早く死んでください」と言わんばかりに財産分与を要求し、お金をわしづかみにして家を飛び出し、行方知れずになってずっと父を悲ませてきた。兄はそんな父の苦勞を知っているの、のうのうと帰って来た弟に怒ったのではないか。そんなことを想像しますが、果たしてそうだったのか。28節、29節を読んでください。父の心に寄り添うような言葉はひとこともありません。むしろ、この兄が訴えているのは父親への怒りです。父親のことを心配して言ったのではありません。

では兄息子が怒った根本的な理由は何であったのか。そのことはまた後で触れるとしてその前に父が語ったことばに目を留めます。

## 2 父

### 1) いつも一緒にいる

大きく分けて二つあります。まず一つ目は31節。「子よ、おまえはいつも私と一緒にいる。私のものは全部おまえのものだ。」

このうちの「私のものは全部おまえのものだ」は先ほど見ましたから、最初の部分の「お前はいつも私と一緒にいる。」に注目します。兄息子は弟のように家出をすることもなく、父親に一生懸命

仕えてきて、この日も畑で汗を流して働いてきました。父から言われるまでもなく、兄息子は父親と一緒にいます。こんなことはわかりきっていることなので、いまさら父親に言われることでもなさそうですね。それなのにどうしてわざわざ念を押すのでしょうか。

私たちは時々、自分にはなくて他の人にはあるものを見ると、うらやましいとか妬ましい思いが湧いてきて、敏感に反応することがあります。けれどもすでに持っているものについてはどうかというと、まったく鈍感で持っていることさえ忘れている。あるいは、価値がわかっていない。そういうことがある。

この兄もそうです。父と一緒にいたという事実には、それがどれほどすばらしいことであったのか、なにも気がついていない。むしろ取るに足りないこととしか思っていない。そんな兄に対して、父は自分と一緒にいてくれたことがどれほど大切であったかをもう一度思い起こさせます。

## 2) 死んでいたものが生き返ったのだから

そのことは父が語ったことの二つ目にも現れています。32節。「だが、おまえの弟は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから、喜び祝うのは当然ではないか。」

私たちは「死ぬ」ということばを聞くと、それは心臓が止まったのだとか瞳孔が開いて反応しないとかいろいろな医学的知識のことを思い浮かべます。しかし聖書における人間の死の定義は、まったく違います。人間の死は、父の家、すなわち神の所から飛び出して行方不明になってしまう状態のことで、もし人が父の家、すなわち神に立ち戻るなら、その人は生き返ることになる。これが聖書における生と死の定義です。

ところがこんなことを言いますと、死んだ者がよみがえることなどあり得ないと言って笑われるだけ。また「あなたは死んでいるのです」と言うものなら、色をなして「私は死んではいません。生きています」と抗議されるでしょう。

## 3) 兄タイプ、弟タイプ

そこでわかりやすくするために別の言い方をします。このたとえ話を読んで、何も感じないという方はおそらくいないでしょう。自分は弟のタイプか、兄のタイプか、あるいはどちらタイプも併せ持っていると感じる方もいる。なぜそんなふうに共感するのか。どこかに自分と同じものがあるからですね。弟と同じようにひどいことをしてきたと思

返します。あるいは、兄のように真面目に生きてきたけれど、心の中は不満だらけで、怒りがマグマのように渦巻いている自分に気がつきます。そんな自分の姿を振り返って、幸せだと思っているか。そんなことはない。皆、そのところで苦しんでいる。実はそれが霊的に死んでいる状態であると、このたとえ話は教えるのです。そんな死んだ状態の人が、もし父の家に帰るころができたなら、あなたはあの弟のように生き返ることができる。でも問題なのは、どうやって戻るかです。神である父に対してひどい罪を犯したのですから、そのまま戻れるわけではない。それでいつも言うのです。私たちには救い主イエス・キリストが必要である、と。

## 3 イエス・キリスト

### 1) 肥えた子牛を屠った

ではその救い主イエスは、このたとえ話のどこかに出てくるのでしょうか。どこにも出てこないように見えます。ところがよく目をこらすと、きちんと書かれています。27節です。「あなたのご兄弟がお帰りになりました。無事な姿でお迎えしたので、お父様が、肥えた子牛を屠られたのです。」

弟息子が無事な姿で帰って来たから、肥えた子牛を屠った。話しの順序としてはそのとおりです。しかしここはこうも訳すことが可能です。「無事な姿で迎えるために、肥えた子牛を屠られたのです。」聖書では、「屠る」ということばは、もちろんごちそうを用意するという意味もありますが、「犠牲を献げる」という意味でも使います。罪人を無事に迎えるために犠牲を献げる。ここまで言えば、気がつきませんか。「肥えた子牛」というのは、「イエス・キリスト」ともつながる。そのように見えてくるのではないですか。

先ほど、兄息子が腹を立てた本当の原因はなんだろうかと問いかけたままでした。兄はいろいろな理屈はこねていますが、注目すべきはこの発言です。29節後半。「その私には、友だちと楽しむようにと、子やぎ一匹下さったこともありません。」父親が弟息子のために肥えた子牛を屠ったことに腹を立てた。これが兄息子の本当の怒りの原因です。神のひとり子が、あんな弟のために屠られるなど断じてありえない。それで怒っているとも言い換えることができます。

### 2) 屠られた神

たとえ話は32節の父の言葉で終わります。兄息子がこの後どうしたかはなにも書かれていません。でも私たちは知っています。兄息子にたとえら

れていたパリサイ人律法学者たちは何をしたか。彼らはイエスを十字架に追いやり、殺してしまいます。「自分には子やぎ一匹下さいませんでした」と腹を立てた人たちが、自らの手で肥えた子牛であるイエス・キリストを屠っていった。そういうことになる。それを聞いて、兄はひどい人間だと怒るでしょうか。兄は決して他人ではない。私たちの姿そのものであることを忘れてはなりません。

### 3) “不公平な”神

この父親が弟息子と兄息子とではまるで扱いが違う。そこに目が留まって、神はなんと不公平だろうと引っかかった方もいるでしょう。それは決して間違いではありません。神は公平な方ではあるのですが、こと救いということ言えば、兄が腹を立てるほどに神は不公平だとも言えます。「それはあんまりだ。納得できない」と言うでしょうか。でも、こんなふうにならぬように私たちが神に対して腹を立てるのは正しいことなのか。そもそも神に対して罪を犯したのは私たちではなかったですか。そう考えれば、腹を立てるどころか、不公平な神で本当に良かったと感謝したくなるのではないか。何が一番不公平であったのか。死んでいた者を無事な姿で迎えるために、この方はご自分のひとり子であるイエス・キリストを屠ってくださったのです。そのことに感謝したいと願います。